

長谷のいもじ松（春日町）

東の空が、ほんのり明るくなり始めました。「では、行ってくるぞ。」「どうぞ、お気をつけて。」

旅したくをととのえた定右衛門は、家人に見送られて京都へ出発しました。

京都、方広寺（ほうこうじ）の大つり鐘をつくることになり、諸国の名鑄物師（いものし）たちが集められました。

丹波国、穀料（こくりょう）長谷村（春日町国領）の鑄物師定右衛門もその中のひとりに加わっていたのです。

方広寺に参集した鑄物師たちは、それぞれ考えを出し合って諸準備をととのえました。

吉日を選んでいよいよ鑄造（ちゆうぞう）にかかりました。ところが、どうしたことが溶鉄（ようてつ）を湯（ゆ）つぼに流しこむために使っていた樋（と）ゆ）が、熱のために燃（も）えあがってしまいました。二度、三度、樋をつくりなおしましたが、やっぱりだめでした。名鑄物師たちも思わぬできごとですっかり困ってしまいました。

定右衛門は、丹波の山奥の鑄物師というのであまり意見を出すことができませんでした。ほかの鑄物師たちが必死になって作った五回目の樋が、また燃えだしたのを見た定右衛門は、「わたしの作った樋なら、決して燃えないだろうに。」と、思わずひとりごとを言ってしまいました。

このひとりごとを、そばにいたひとりの鑄物師が聞きつけて、みんなに知らせました。

「それでは、その燃えない樋を作ってもらおうじゃないか。」みんなが言い出しました。

そのことばには、何としてもこの急場をしのぎたいという気持のほかに、「われわれにできないことが、丹波の田舎（いなか）鑄物師なんかにはできるものか。」という、あなどりの気持を持って言っていることを定右衛門は感じました。こうなっては、あとへはさがれません。

「はい、それでは作って見ましょう。十日ばかりお待ちください。」定右衛門は自信はありましたが、万一のことも考え決死の覚悟（かくご）でひきうけました。

彼は、大いそぎで郷里の長谷村へ帰ってきました。そして、奥長谷の山から「いもじ松」を切り出すと、その生木（なまき）で樋をつくり、ふたたび京都へのぼりました。

「いもじ松」の樋が、湯口から湯つぼへかけられました。

「よーし、いくぞ。」まっかな溶鉄が、はげしい湯けむりを立てながら流れ出しました。

「流れていくぞ！燃えない！燃えない！成功だ。」鑄物師たちは、おどろき感心すると共に、ほっとしました。一番ほっとしたのは、定右衛門であったことは言うまでもありません。

定右衛門はこの功績（こうせき）によって、「松木」という姓をいただきました。

慶長十八年六月、方広寺の大つり鐘の鑄造（ちゆうぞう）がなり、盛大な供養（くよう）がおこなわれました。

この鐘の「国家安康（あんこう）」という銘（めい）がもとになり、豊臣方と徳川方が再び戦うことになったのは、有名な話ですが、その鑄造（ちゆうぞう）をめぐるこんな話があったのです。

「松木」家は、その後、ひじょうに栄えたといわれ、現在も「松木」という姓は、国領に残っております。

